慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 奥井復太郎の生活研究 : 「都市生活構造」論の原点 |
| Sub Title | |
| Author | 原田, 勝弘(Harada, Katsuhiro) |
| Publisher | 三田社会学会 |
| Publication year | 1997 |
| Jtitle | 三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997. ) ,p.51- 55 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 特集II: 奥井復太郎の都市論 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0051 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 奥井復太郎の生活研究
## 「都市生活構造」論の原点

原田 勝弘

### 1 「奥井都市学」と時代をみる視点

奥井復太郎が自らの都市生活において終始強調してきたことは、都市現象の分析を絶えず歴史的、時代的制約のなかで試みる点にあった。都市の景観に表れる変遷とその土地に居住する人間の行動様式や生活様式の変化に見る都市現象としての特質は、したがってそれぞれの時代の社会組織を決定する基本的な政治的経済的諸関係に規定された「時代的性格」との関連のなかで解明されるべきものであった。

東京下谷の車坂の商家に生まれ、後に山の手の本郷に移り住むという生いたちから始まる奥井復太郎の生活史が、「奥井都市学」の優れて独自な世界を形成する上での重要な培養器の役割を果たしているのは、奥井自身が後年「明治・大正・昭和の私」(奥井 1960)でのべているように、近代日本の都市生活を研究するものにとって「非常にめぐまれた位置」としての「時代」と「場」に身を置いたことに深く係わるのであり、しかもその「場」で「境界人」である自己を認識し、観察することのできる原点(回帰点)を見出したことによるであろう。明治の東京から大正、そして昭和の大東京へと変遷していく地域社会の様相を、奥井復太郎は幼少年期から青年期にかけて過ごした本郷での体験をふまえて語ろうとするときの視点のなかに、その地域の<景観>と、その地域の「土地柄」を示す住民の<生活>と、そこに住む人たちの「心意」としての<パーソナリティ>を「三位一体」のものとして全体関連的に把握する方法が絶えず内在的に活かされており、後年の「大都市研究」を支える基本的な方法論の原点に奥井の自己形成期に体認する「生活の場」を通して獲得された特有の「時代をみる視点」が刻みとめられているように思われる[1)]。

### 2 都市生活「観察者」の基点

昭和5年は奥井復太郎が都市研究に明確な問題意識の焦点を絞り込む論文「『都市問題』一考察」(1930a)が発表された年である。この論文は、それ以前に書かれた「独逸都市研究序論」(1928)や「都市問題序論」(1929)よりもさらに都市研究への自身の方法論に踏み込み、従来の経済学的観点から大都市の社会学的な方法を自らの立場に引き寄せようとしている。奥井は、ここで自分の研究対象とする諸問題を限定して次のようにのべている。「是等の諸問題は、普通に云われる都市経済論の問題でも都市問題でもない。かかる方面の研究を取扱うものに漠然ではあるが称して都市社会学なる名称が冠せられる。…中略…都市生活に於ける市民の生活特色、大都市の相貌と云うものを研究する此の研究は、好奇

興味本位に堕する恐れあるが、それ丈け面白い研究となりうる。此の都市社会学にあって出来る丈け客観的取扱いを尊重すべきであろう」(1930a,96頁)。

この論文が書かれる時期には、奥井は依然として「独逸社会政策理論前史」(1930b)など一連の社会政策研究に関する論文を矢つぎばやに発表しているが、この間を縫って論じた「『都市問題』一考察」は奥井自身のその後の研究方向を決定づけるマニフェストであると同時に、先に引用した文章に示されているように「市民の生活特色」や「大都市の相貌」を明らかにすることを目指すなかで、それが「好奇興味本位に堕する恐れ」を戒め、「出来る丈け客観的取扱いを尊重」しつつ「面白い研究」を企画としようとしていた初発の問題意識を如実に提起した論文でもあったといえよう。だが、この論文は全体として都市問題研究の理論的、抽象的な記述に留まり、自らの独自な問題関心に即した都市現象の研究領域や観察対象については具体的内実には触れられていない。そうした研究領域である都市現象としての「大都市の相貌」をめぐって具体的に語っているのが、この論文の発表後『三田新聞』に掲載した「大都会の生活研究」(1930c)である。

この文章のなかで、奥井は冒頭、大都市の出現と共に都市問題は重要な関心をもたれるようになるとともに、その多くの関心が赴くところは「大公園」や「下水道工事」、「道路交通網計画」、さらに「田園都市」や「郊外住宅」、「小都市主義地方計画」などをめぐる「都市計画」に集中している点を指摘する。しかし、奥井はこれら「都市計画」の諸問題がこの時代においていずれも重要であることは認めた上でさらに自分自身の研究関心はこれらとは別の課題にあるとして以下のようにのべた。「しかし、なお別に自分にとって興味ある問題は、大都会生活の研究である。大都会の生活の研究とは都会生活者の主として、消費経済的方面の研究である」(奥井 1930b)。この「消費経済的方面の生活相」を奥井は同時代の昭和初期における時代相や都市風俗文化を表徴する「モダーン」・「尖端的」・「1930年型」・「エロ」・「グロ」・「テロ」・「プロ」・「神経衰弱症」など特有のことばを駆使しながら自由闊達に素描している。

この「大都市の生活研究」の結びで、奥井は自分自身の研究方面を次のように示唆した。「是等の問題は大部分社会心理学に属するものだろう。…中略…しかし都市問題の研究者として「都会化」問題を論ずる者はどうしても、一度は手に染めなければならなぬ問題である。徒らに、都会の軽佻浮薄、田舎の強健素朴を云々する前に、自分が今持っている研究上の希望は、かかる見地に於いて、都会生活の細かい諸相を観察したい事である。しかし此の研究はディレッタンティズムに堕する著しい危険が蔵せられる。学究の最も警しめねばならぬことである」(1930c,2頁)。ここでも、奥井は「ディレッタンティズム」に陥ることを警戒しながらも、先ずは都市生活上に立ち現れる具体的諸現象の社会心理学的「観察者」であろうとする積極的な立場を表明しており、したがってこの文章がやがては都市民衆の生活スタイルの実相とその変貌する姿をフォークリストの眼差しで捉えつつ、他方で社会調査の手法を取り入れることで三田の学生街や郊外地の実態を明らかにしようとす

る「観察」研究の基点でもあったといえよう。

3　都市フォークリストの視線と研究方法

ところで、この当時の都市生活者の「観察者」といえば、今和次郎の名を挙げなければならない。今は奥井よりもやや先行して都市風俗の「考現学」的観察調査(今 1971)を進めているが、当時の東京を中心とする大都市の生活実相を捉えようとするほぼ同時代の研究者であった。奥井復太郎が自らの研究のなかで、今和次郎の考現学研究への評価に触れている論文では、第一に「『盛り場』に関する若干考察」(1935)があり、次いで「地域的社会調査に関する若干考察」(1936)が挙げられる。いずれも調査する対象地や居住地の特性を捉える上での「よき指針」となりうる可能性をめぐって言及しているが、ただし後者ではつづけて次のようにのべている。「ただ、われわれ調査者において、もっとも戒心すべきは調査上の興味にひきずられて、根本を忘れて末節に堕し、興味本位、面白半分におちいる危険に近いということである」(1936;1940,458頁)。以上のような言及部分を通して、奥井が今の仕事をどのような視線で捉えていたか推察できるであろう。奥井が都市研究の始発期に「ディレッタンティズムに堕する」ことを恐れ、戒めることばを繰り返し吐露したのは同時代の観察者である今の作品の「影」を絶えず意識していたに相違ない。

奥井復太郎の都市生活研究において、自己の個人史上の出来事や荷風をはじめ多くの文学作品を通じてその背後によこたわる時代的制約を語る際には、彼特有の都市フォークリストとしての視線が発揮されているが、しかしその視線のきり結ぶ焦点は今和次郎のそれとは異なるものであった。奥井の研究方法の基底には、「一班をみて全貌をしる」という姿勢が厳然と存在しており、「大都市社会の成立・構造・性格、つまり全貌をわきまえておれば、そのうちの一人格、つまり一班をとらえて、全貌を語ることができる」(1963;1975,129頁)と考えていた。この意味では、奥井が都市研究の古典的文献として挙げるW.A.スモールの「都市成立史」(『社会学入門』第一章)で採用された「文学的手法」に倣って、「パーソナル・ヒストリーないしドキュメントとして可能であるかもしれない」(1963;1975,130頁)研究方向をより踏み込んだ形で辿ることもできたはずであった。

しかし、奥井の都市研究における歩みにおいては社会調査研究の成果に見出される「一班」を構造的全体と結びつけて捉えようとする実証的調査研究へと赴くのであるが、にもかかわらず終生の業績を通観するときにはその分析の場に様々なる意匠をこらした「ライフドキュメント」の質的データを絶妙なバランスで織り込んでいく方法を依然として把持していることを知るのである。そこにわれわれは、日本の都市近代の絶え間なく変動する生活姿態を優れて複眼的な眼で捉えようとした方法の先駆けに出会うことができる。

4　「もうひとつの生活構造論」とその課題

奥井復太郎の都市生活を捉える理論的枠組みは、「それぞれの時代的な社会組織を通じ

ての時代的制約による都市現象」を生活基盤(社会基盤)—生活体系—生活理念(生活基盤—生活体制—生活信条という記述もなされている)という構造で総合的に把握しようとしてきた。この三位一体の分析枠組はさらに「土地柄」と「人柄」と「心柄」の三位一体とそれぞれ対応させることで都市地域の制度的、景観的構造とその地域内部の社会集団的性格、そしてそこに暮らす人間の社会心理的「心意」などの関連を重層的に捉えようとする仕組みになっている。こうした理論図式を具体的な事例のなかでいきいきと説明しているのが「荷風と東京」(1959a,1959b;1975,424-426頁)であるが、ここでとりわけ印象的な描き方をしているのは、『綴り方教室』で知られる豊田正子の作品「れんが女工」に登場する大工一家の事例である[2)]。この豊田正子の作品を事例に挙げた点で想起されるのは、同じく彼女の『綴り方教室』を素材として書かれた永野順造の論文「『綴り方教室』の生活構造」である(永野 1939)。

この永野の論文は、「生活構造」ということばを分析用語として自覚的に使用したほとんど最初の研究であり、その後の「生活構造」研究として籠山京、中鉢正美らの系譜に連なる「源流」をなすものであるが、他方でもうひとつの「祖型」を都市生活研究から求めるとすれば、それは他ならぬ奥井復太郎の戦前期における生活様式(スタイル)論や「生活体系」論に見出すことができよう。『現代大都市論』に登場する郊外生活者、サラリーマンたちが都心のオフィスを往復通勤することで繰り返されるラッシュアワー現象に映し出される「生活の周期的リズム」(1940,347-374頁)や郊外地に形成される「有識無産階級のつつましやかなる小住宅」(1940,375-379頁)にみる生活スタイルの変容とその再構成過程の分析をはじめとする研究は、鈴木榮太郎(鈴木 1957)や磯村英一(磯村 1959)らによって戦後に展開される都市生活者の社会学的「生活構造」論の原点であったといえる[3)]。

奥井のこのような「生活構造」論的枠組は、戦後も晩年期に所長として就任する国民生活研究所を舞台に、この時代に特有な役割を担いながら展開していく「国民生活論」や「市民生活論」、「生活態度論」などの所論のなかにも脈々として受け継がれていくのである。奥井復太郎が死去する二週間前に行った講演の要約である「国民生活向上の手がかり」のなかで使用されている「生活の社会構造」という用語には、本来の持論である<生活基盤—生活体制—生活理念>という三位一体の構造連関を通じて説明がなされ、このことばを鍵概念としつつ「生活向上の方策」として、元来日本人が不得手であり、未だ身についていない「共同化」、「公益化」による生活問題の解決策を説き、その具体的な施策の場に言及しながら次のようにのべている。「生活は国民、地域、個人の三段階のうち、地域の段階でとりあげるべきであり、この地域の生活環境の整備こそ、国民生活の向上に最も寄与するものである」(1965b,巻頭)。

奥井復太郎の絶筆となった「新旧渺茫」のなかで、「庶民の叡知」ということばに託して高度成長への移行期の生活問題になお取りくもうとする奥井の想いと、末尾に記された「このように国民の生活に激変が起こった今日、“明治は遥けくなりにけり”と述懐せざ

るを得ない(1965a,巻頭)」とする感慨を今あらためて読み直すと、この優れて先駆的な都市生活の観察者が日本の近現代の大変動のさなかに刻みとめた、さまざまに底深い課題が再び私たちの眼前に鮮やかに蘇ってくるのであり、しかもそれらからの提起された諸課題は、本質的には未だ解決からはほど遠い、という思念をおさえることができないのである。

註

1) 本稿は『奥井復太郎著作集』別巻に収録された第八巻解題の拙稿「複眼の都市観察者」の内容をベースに再構成し、部分的に書き改めたものであるが、奥井復太郎の生いたちから始まる個人史が後年の「都市研究」に及ぼした諸影響や、この自己形成期に体認する「生活の場」を通じて獲得されたと考えられる特有の「境界人」的性格をめぐる考察については一切省いている。これらの検討部分については拙稿(原田 1996)を参照。
2) 豊田正子や永井荷風の作品をめぐる奥井の事例分析の考察は拙稿(原田 1985)を参照。
3) 生活構造研究に関する系譜ならびに戦後の動向については拙稿(1985,1991)を参照。

文献


奥井復太郎　1928　「独逸都市研究序論」『三田学会雑誌』第22巻、第3号
――――　1929　「都市問題序論」『三田評論』第379号
――――　1930a　「『都市問題』一考察」『三田学会雑誌』第24巻、第2号
――――　1930b　「独逸社会政策理論前史」『三田学会雑誌』第24巻、第9号
――――　1930c　「大都市の生活研究」『三田新聞』第254号(1930年10月24日付)
――――　1935　「『盛り場』に関する若干考察」」『三田学会雑誌』第29巻、第3号
――――　1936　「地域的社会調査に関する若干考察」」『三田学会雑誌』第30巻、第6号
――――　1940　『現代大都市論』有斐閣
――――　1959a　「荷風と東京」(1)『三田評論』第584号
――――　1959b　「荷風と東京」(2)『三田評論』第585号
――――　1963　「再論『現代大都市論』」『三田学会雑誌』第56巻、第10号
――――　1965a　「新旧渺茫」『国民生活研究』第4巻、第1号
――――　1965b　「国民生活向上の手がかり」『国民生活研究』第4巻、第3号
――――　1975　『都市の精神』日本放送出版協会
――――　1996　『奥井復太郎著作集』大空社
磯村英一　1957　『都市社会学研究』有斐閣
今和次郎　1971　『考現学』(今和次郎集)ドメス出版
永野順造　1939　「綴り方教室の生活構造」『国民生活の分析』時潮社
鈴木榮太郎　1957　『都市社会学原理』有斐閣
原田勝弘　1985　「労働者生活研究の現在」『労働史研究』第2号
――――　1991　「生活構造研究の源流」『明治学院論叢』第475号
――――　1996　「複眼の都市観察者」『奥井復太郎著作集』別巻、大空社、396～415頁


(はらだ　かつひろ　明治学院大学社会学部)